

日本一の共販率を生んだ産地

飛馬の里から

9月下旬、早生ふじが真っ赤に色付き、中生種の収穫期を迎えたJA相馬村管内。弘前市街地よりやや高地に広がるリンゴ畑で生産された相馬産リンゴは色付きが良く、甘酸適和で味の良さが一番の特徴だ。平成30年産リンゴの出荷も快調な出足となり、主力品種である「ふじ」を中心とした晩生種にも期待が掛かる。

相馬の屋号ともいえる「飛馬」（ひうま）。

飛馬印リンゴが生産されているここ飛馬の里は、JAと組合員の深い絆が存在する歴史ある地域だ。

J A 相馬村 自然が美しく リンゴが美味しい里

昭和39年10月に1村1農協としての「相馬村農協」が誕生。平成3年9月の台風19号によって落果したリンゴに対する迅速な対応を経て組合員との厚い信頼を築いたことをきっかけに全国でもトップクラスのリンゴ取扱量と販売額を生み出した。まさに、「リンゴ系統出荷率」日本一の名を誇る農協である。しかし、あれから月日は流れ、来年、55周年という節目を迎えようとしている現在、農業を取り巻く環境は作れば売れる時代から消費者ニーズに合わせた生産が必要な時代へとシフトした。消費地から選ばれる産地となり、飛馬ブランドの真価を発揮するためには、美味しいリンゴを作ること、これを大前提に生産から販売まで一体となった取組が重要となっている。

今回は、先人たちが築き上げてきたこの名高い「産地」と「組織」のこれまでを振り返り、後世に伝えていきたい。そして、組合員の豊かな暮らしの実現に向けて自己改革の目標である「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」を胸に飛馬ブランドの更なるグレードアップに結び付けていきたいと思う。

沢口義明さんのご家族（紙漉沢地区）。一番左から義明さん、公紀さん、舞さん、煌大朗くん、靖子さん。

協同のあゆみ

リンゴを柱とした現在のJA相馬村の原点はここにあった

「農協があの手では、村が合併しても農協は大人にならない：だから今は合併できない。」宮川正久氏（宮川村長）の言葉だった。昭和30年、岩木、大浦、駒越、相馬、西目屋を除く中弘11市11村が合併し、相馬村にも広域合併の話がでていた。しかし、宮川村長は「このままでは、相馬の農協が

ダメになる。農協をよくしてからでないと、相馬は合併してもダメだ。」と言った。宮川村長は農家のしあわせを常に考え、公金の出資や土地の提供など農協の育成を「農家のために何としてみやりたい」という厚い信念で業務を進めた。

昭和39年、相馬村農業協同組合と相馬第一農業協同組合が合併し、一行政区一農協が誕生し、農業振興と農家経営の安定に寄与する重要な役割を担うこととなった。相馬村は、リンゴ・コメを二大作物と位置づけ、特にリンゴ産業の振興には、生産指導と並行し流通部門の施設拡充を掲げた。相馬村農業の振興方向は合併当初から、リンゴ施設建設の必要性を訴えており、純農村としてリンゴを柱に推進することを確認したものである。当時の農家戸数は695戸で栽培面積は389.3ha、戸あたり56㎡と決して大きな面積ではなかったものの、リンゴに適した土壌、冷涼な気象、旺盛な生産意欲がリンゴ産業を強く育て、経営規模拡大を可能にした。

一方、相馬村の方針として生産技術の向上と教育活動を進めるた



農協が合併して間もない役員室

めに指導員の配置、広報誌の発行、共同販売などの奉仕活動やリンゴ主産地としての豊かな経済力を付けるための品種構成改善の幹旋、農協施設整備やリンゴと稲作の機械化に向けた推進など数多くの事業等を展開していった。また、稲作の省力化による余剰労働力をリ

ンゴに振り向けることによってリンゴに特化することを実現させ、相馬村農協が築き上げられていった。

合併10年の足どりをみると、国内経済の成長が高度化し、反面、消費者物価の高騰、貿易の自由化による農畜産物の輸入、コメの生産調整による減反、米価据置きと加えて自然災害等で農家・農協の経済基盤が弱体化の方向をたどるなど厳しさの連続であったものの、組合員が主体性をもって農協を利用したことによって事業量は順調に経過したものであった。宮川村長の農家への思いやり、生産者、農協が一丸となって取組んできた結果が現在に及ぶと云えよう。

台風十九号の転機

リンゴ栽培史上最悪の被害を受けた一方で、当JAは迅速かつ的確な対応に取組んだことで日本一の共販を生み出した

平成3年9月28日早朝、リンゴの収穫も間近という時に、瞬間最大風速53.9m/sで青森地方気象台始まって以来の最大の強風を受け、



宮川 正久 氏

昭和24年から36年までJA村長を務め、今のJA相馬村の礎を築いた偉大な人物

飛馬 の 里から



弘前市街地よりやや高地に広がる相馬のリンゴ畑



生産者ひとりひとりが高品質生産に向けて取り組むリンゴに特化した地域



着色及び糖度・蜜入りが魅力



生産から販売まで一体となった指導を最前線で展開

特集2

回顧と展望

落果りんご34.5万個、樹上損傷4.3万個、樹体倒伏・裂開56万7,000本、被害総額742億円という青森県リンゴ栽培史上最悪の被害を台風19号がもたらした。

台風の吹き返しがまだ止まぬ当日の午前7時30分、農協では緊急役員会議を招集。会議では地域



台風19号でリンゴ園は壊滅的被害を出した

住民を午前中のうちに全職員で手分けして見舞うことを決めた。災害の中でただ茫然としている地域住民を見舞った職員に家屋等の被害調査を確認させ、共済加入の安堵感をもていただいた。さらに、落果りんごは品種別に仕分けして集荷させるなど、県、経済連、農工連が対策を示す以前に農協独自の見切り指導をした。それが後に県内外のマスコミから大きな注目を集め、大成功となる。

地域によっては、落果りんごを深く掘った穴に捨てる戦略をとるなど、その光景は報道でも大きく取り上げられた。そのようなかで、相馬村農協は積極的に大都会の消費者とのネットワークを活かして落果りんごを売りさばいた。また、各農協、商系とも「つがる」の選果荷造りが先決と、落果りんごは二の次とし、全国からの支援購入を断ったが、当農協は総合選果システムを駆使し、生産者の応援協力で「つがる」の選果荷造りを順調に進め、併せて落果りんごの選果荷造りもできた。そのため、購入申し込みのほとんどが当農協に殺到した。

当農協は、1億円を超える落果リンゴに対する助成及び災害対策費などの支出を組合員に明示し、

企画力や決断といった生産者を第一に思いつ対応が組合員の心を掴み、それが後に「リンゴの販売日本」の農協を生み出すこととなった。リンゴ栽培史上最悪の被害を転機に「日本一の共販」が生まれたことは基より、「協同の絆」という大きな力が相馬村農協の財産となったことは言うまでもないだろう。この台風19号から我々は多くの教訓を得た。

消費販売動向の変化

消費者ニーズに合わせたリンゴ生産が必要時代となり、現在の消費・販売動向が確立された原点はここにあった

青森県リンゴの歴史をさかのぼると「津軽の国光、南部の紅玉」として品種構成が確立して以来、約7年間にわたってこれがリンゴ経営の定型となり、販売と消費開拓の主力であった。しかし、後の昭和40年代に国光、紅玉からデリ

シャス系とふじに品種構成の首座が交替した。

国光と紅玉の生産量の多さから過剰供給を引き起こす状況となったことに加え、天候不良と早出しによる品質及び食味等の低下が要因となり「山川市場」と呼ばれる国光の大量投棄を迎える結果となった。この現象の経緯には、販売及び生産者側目線である出荷ピークを避けた「早出し」などの思惑も含まれるのだが、赤くとも酸味が強いリンゴなどは消費者を失望させるとともに衰退の道を辿り、リンゴ産業は品種更新期を迎える。その更新品種は、まさに現在の国内生産量第一位を誇る「ふじ」である。「ふじ」の味覚は消費者に喜ばれ、高値でも飛ぶように売れたほか、流通業界としてもこのような消費性の高い果実に利巾が得られる商業利益に意欲的であった。

現在、スマートフレッシュ処理などCA貯蔵技術の向上によりリンゴ販売戦略が進化している中で、リンゴの輸出による国内需要調整も大きく精算単価に影響している。近年、リンゴの高値販売を保っており、昔のような大暴落もなく

なってきたのが現状だ。しかしながら、やはり消費者の商品に対するこだわり、価格以上の感動を与えてくれる商品へと嗜好が変わってきており、飛馬ふじなどは、

年末の贈答シーズンにおけるギフトで全国のお客様から大好評を受けている。それは贈答品の原体が足りなくなるくらいの注文が殺到するほどである。消費者ニーズに合わせた生産は、今や当たり前の時代を迎えたと言っても過言ではないだろう。高品質生産で農業所得増大に繋がっていることは言うまでもなく、これまで築き上げてきた消費者との飛馬ブランドに対する信頼を裏切らないためにも高品質生産でブランド力の維持に努めていかなければならない。

労働力不足解消への道

快適かつ円滑に作業を進めるためには、生産者と援農者（補助労働力）の双方が勉強し合う必要がある

リンゴに限らず、農業を取り巻く環境は高齢化や後継者不足を背景に労働力不足が深刻な問題と

なっている。農業の担い手や補助労働力不足の進行は、病害虫防除や早期適正着果、適期収穫などに影響を及ぼし、高品質なリンゴ生産を継続していく上で大きな課題であり、その対応が急務とされている。当JA管内のリンゴ生産者においても、自家労働力だけでは間に合わず、労働力が足りていないという声が約半数の割合を占めているのが現状であり、雇用者においても高齢化により従来の雇用形態を維持することが難しくなっているのが現状だ。

平成30年9月26日に開催された「第54回通常総会」においても最重要課題の一つとして「労働力不足の対策に取り組み、農業生産拡大をはかる」との言葉が掲げられている。当JAでは、この問題についていち早く解消しようとする様々な視点から取り組みを進めている。その一つに補助労働力確保に向けた「援農隊マッチング支援事業」の活用がある。この事業については、当JAが青森県のモデル地域となっており、大きな注目を集めている。この事業における特徴として挙げられるのは、出勤日や勤務時間

組合員をはじめ各関係機関が一丸となって産地強化を図る



農業者の所得増大

援農隊マッチング支援事業

高齢化対策として補助労働力の確保に向けた取組を展開



飛馬ブランド

飛馬ふじ、優良系サンふじを中心にブランド力の維持・向上を展開



国内はもとより、海外輸出にも重点的に取組を展開

海外輸出の強化

を援農者に合わせるといった雇用条件の緩和である。これにより、今まで農作業を手伝いたくても条件が合わず、応募に躊躇していた層からの労働力の確保が可能となったのである。

援農隊の応募者の中には、農業未経験者であっても「農業に触れ合い、少しでも農家の力になればやってみたい」という暖かい意見を持つ人も多い。そのような中で、当JAは援農者のリングゴ作

業における技術習得及び向上に向けて、インターネット上でホームページを活用した分かりやすい写真付きの説明と動画配信をスタートさせている（県庁及びJA相馬村ホームページからアクセス）。

農業生産の拡大を展開していくためには、労働力も必要不可欠であることから労働力確保に向けて二層の対策強化を図っていく方針だ。

リンゴ生産に特化した農協としてJA相馬村の地位が確立されたのは、数多くの苦難を乗り越えてきた先人たちの汗と涙の結晶であった。私たちにとって「相馬」という飛馬ブランドは誇り高き財産である。今後、年月とともに世代交代が加速していく中で、我々はこの歴史の歩みを後世に伝え、産地を守っていく必要がある。リンゴ生産においては、消費者ニーズにあった高品質生産が農業所得

の増大に大きく結び付いており、鮮度重視で適期収穫が鍵を握っている。当JAはリンゴに特化した単独農協としての生き残りを掛け、今後も組合員の皆様に最大限の力添えが出来るよう取り組んで参ります。

（参考：青森県りんご百年史
青森農業の発展と農協の販売力強化）

農業生産の拡大